

多文化共生と心理臨床

ガヴィニオ 重利子

欧州では、このたびのシリア危機などを受け、難民や移民の問題がこれまで以上に議論されるようになった。私が暮らすこの街も国際機関が多く存在することから、移民の数は全体人口の半分近くにのぼる。住民の国籍は実に多彩で、息子達が通う地元の公立学校でも、クラスメートは一人一人違う国籍と言っても過言ではない。新学期にはそれぞれの児童が自分の国の紹介や国旗の絵を模造紙に作成し、それを教室に貼り出すということが恒例になっている。

そんなこの国で、先日ある学校で起こった事件が報じられた。「宗教上の理由により先生との握手を数名の生徒が拒否」というものだった。こちらの学校では一日の終わり、先生が教室の出入り口に立ち、生徒一人一人と握手をしてさようならをする習慣がある。日本でいうところの「起立、礼、さようなら」と同じ役割を持つのだろう。子ども達は列をなして、先生と握手してから下校する。

この握手について、宗教上の理由から異性の手を握ることができないと、数名の生徒が拒否をした。そして学校は、これを認めた。が、である……。その後の続報で、この子ども達が申請していたこの国の国籍取得について、国が保留を決めたことが判ったのだ。これは差別か？それとも妥当な判断か？地元紙は議論を投げかけた。「外国人として暮らすなら良い」けど、「私たちの一員としては認めないよ」とも理解できるその判断が、様々な議論を呼んだようだった。（この原稿の提出日、新聞はこの学校が位置する州が握手を拒む生徒の親に対する罰金の支払いを条例化したというニュースを報じた。なんだかとっても悲しい展開。）

欧州にいと、日本とは全く違う国籍感覚に出会うことになる。見た目がアジア人であってもアジアに行ったことのないフランス人やドイツ人はたくさんいるし、親がそれぞれ違う国籍を有するため、生まれたときから複数の国籍を持つ人も珍しくない。我が子

を含め、家で話す言語や暮らす風習と外でのそれが異なる子どもも多く、国籍はともすれば「選ぶもの」であり、その個人のアイデンティティーとは必ずしも直結しない印象を受けることが少なくない。

そんな中で読んだこの記事に、国籍って一体なんなのだろう？多文化共生ってどういうことを指すんだろう？と改めて考えさせられた。

それぞれの国には、それぞれの文化や伝統、常識が存在し、それらは長い時間をかけて培われてきたその国の人格のようなものだ。それらが混ざり合うとき、そこには摩擦が生じる。「認め合う」「共存する」とは、響きは良いけれど実際には決して易しくないように思う。

先日も、英国のテレビ局でやっていた「警察24時」みたいなのを見ていたら、ある商店の移民女性が借金の滞納により監査と商品の没収を受けるシーンがあった。警察官は、何度も滞納の経緯と裁判所からの通達書類を提示し説明するも、この女性は激しく叫び続け、全く納得しない。仕方なく他の警官の援護を受けて始まった没収作業。それを見て女性はカメラに向かって「あいつは、このドレスを持ち去って自分の嫁とか友達にあげるつもりなのよ！」と言い放った。警官は困惑顔。それでももくもくと作業を続けた結果、挙句に女性はこの警官に殴りかかり、とうとう逮捕となってしまう。

身近でも、先日路面電車を待っていたらある移民と見られる女性が自分の乗り遅れた電車が止まってくれないことに腹を立て、ドアを強打し出した。さんざん叩いても去っていってしまう電車の運転手に向かって、彼女は「なんか食べる！！」と叫んだ。一瞬、なんのことか分からずキョトン。聞き間違えかなと思ったけれど、彼女は確かに手を口にやりながら（食べるジェスチャーをしながら）そう叫んだのだった。

いずれの場合も、警官や電車の運転士は、両腕をあげ（まさにお手上げのポーズ）怒りの混じった呆れを表現していた。多文化環境においては、こういう体験をある特定の人種や国籍を持つ人たちと繰り返す中で、差別や偏見が「真実味をもって」広がっていくのだろうことが、実感される場面だった。

私には、その二つの場面を見ていてひろがる想像がいくつかあった。警察とのやりとりでは、もしかすると彼女の生まれ育った国では、警察などの権威は汚職にまみれているのが常であり、彼らが自分たちの生活を脅かすような行動に出たときには、全力で抵抗し（叫びまくり）守りぬかなくてはならないのかもしれない。そして、そういう場所で

は警官は本当に没収したものを家族や友人に分配するということが平気で起こるのかもしれない。

路面電車を張り倒していた女性も、祖国では食べるものが十分でないという状況が貧しさを表す指標となっており、「何か食べろ！」つまり「お前には何も食べるものがないんだろ！」というのが相手を罵倒するセリフとして成立するのではないかと想像してみたりした。

いずれにしても、そこで起こった出来事の背景にある常識（前提）の違いが、結果として大変分かりづらいコミュニケーションを生んでいたように見える。そこにあったかもしれない前提について、さまざま勝手な想像をしながら、私はそれが普段自分が臨床活動の中でやっていることにとっても近いことに気がついた。聴かされる話や状況の中から、その人にとっての前提や物語を想像してみること。見えていたであろう景色に自由に思いを馳せてみることに。

さまざまな困難を抱えながらも多文化共生を続けてきた欧州。そこで繰り返される移民議論を見ていると、異質なものを理解しようとすることの難しさや複雑さに、人がどう立ち向かうのかを見せられているように感じることもある。ある人は、「博愛でもって全てを受け入れるのが当然」といった理想主義を掲げ、日常の細かな困難については見ない（話さない）という態度をとる。またある人は、「移民はうんざりだ」と扉を閉ざし、あらゆる社会問題を移民のせいだと断じたりする。

思えばこのような反応の数々は、心理援助に携わる私たちが面接室で幾度となく出会ってきたことのように思う。家族関係、友人関係、あるいは自分自身との関係において「異質なもの（それまで意識していなかったこと）との出会い」を体験する来談者からは、実にさまざまな反応が引き出される。そこには恐怖もあれば拒絶もあり、結果としての他罰もあれば、理想化もある。それは援助者の側にもまた、仕事に対するスタンスの違いとして存在しているように思う。来談者を「守られるべき弱者」とし、博愛的な関わりをすることこそが支援であると考える人もあれば、相手を「病者」として見ることで密かに自分を守ろうとする人もいるだろう。

とはいえ、ほとんどの援助者に共通するのは実際の面接の中では来談者の話に耳を傾け、彼らの世界を知ろうと努めることだろう。彼らの持つ常識（前提）を、生きてきた歴史を、そこから見える景色を、理解しようと努力する。ときに自身の感情を大きく揺さぶられながらも、相手を断じたり目を閉ざしたりしてしまいそうになる自分を確かに感じながらも、来談者の真実に一歩ずつ近づこうとする作業。

異文化との出会いにおいて、心理援助に見られるこのような態度は、有益なものになりうるのではないかと考えるようになった。相手に対して起こる嫌悪や驚きや困惑を、否定したり無かったことにしたりしてしまうのではなく、それらに興味を持ち、相手の生きる景色に思いを馳せてみる。そして、その理解を相手と共有してみる。地道ながら、地味ながら、私たちはそれが相手への深く確かな理解を生む道であることを実感してきたのではないだろうか。そしてこの道はまさに、多文化共生に不可欠な他者理解への鍵とも、なりうるのかもしれない。

これからも益々進む国際化やグローバルイゼーションの中で、心理臨床の持つ意味や価値は、社会全体にとっても大変有用で示唆的なものになるように思えてきた。